

ほなひ歴史通信

第74号
2015. 3. 11

何事にも全力投球。気さくで誠実な「動」の人

—小澤園彦先生追悼記念号に寄せて—

石井喜志夫先生が昨年四月に、そして小澤園彦先生までもが同年の十一月に鬼籍に入られることになるとは…。私たちの大切な仕事仲間であり、また郷土史研究のよき先輩でもあったお二人が相次いで逝かれ、この深い寂寥感を何と表現したらよいか、言葉が見つかりません。人の死は免れないものとは言え、無念です。

小澤園彦先生が亡くなられたのは、十一月一日のことでした。享年八〇歳。先生は、多分野にわたって大きな足跡を残されただけに、先生から影響を受けた多くの方々が生先生の死を悼み、別れの悲しみと感謝の念を新たにしました。私たち編集人もまた同じ思いであることから、六人の方にご寄稿を依頼し、本号を「小澤先生追悼記念号」として編集いたしました。在りし日の先生を偲ぶ一助にいただければ幸いです。

私自身、今でももう一度、小澤先生のあの張りのある大きな声と快活な笑い声を聞きたい、もう一度おしゃべりしてみたい、そんな思いを拭えないでいます。その先生との最初の出会いは、新体制の下での町史編さん事業が発足した昭和五十六年五月のことでした。それ以来今日まで、大子町史編さん事業や事業完結後の大子町歴史資料調査研究員の仕事の様々な場面で行動を共にしました。結局、お付き合いは三一年余の長きに及ぶことになります。

この間いつも私たちの牽引車であり、また私たちを絶えず鼓舞し触発し続け、何事にも全力で取り組む姿勢が印象的でした。反面、交流の一齣一齣は実に楽しく、人を引き付ける魅力に富んだ方だとの実感があります。例えば、資料調査や食事等で町内に出掛けた先々でいろいろな方から声をかけられ、また逆に声をかけておられた小澤先生の姿を何度見たことか。

先生は、ふるさと大子を大切に思い、そこに根づいた郷土の文化を大変誇りに思っておられました。それは、『大子町史 通史編』や『ほなひ歴史通信』等々に掲載された数多くの論考に端的に表れています。ふるさと大子に向き合う研究姿勢とその成果である著作物には、いかにも先生らしい三つの特徴があるように思います。一つは、農業、林業、馬産、木炭業といった諸産業の研究だけでなく、考察対象は民俗、文化、宗教、交通、地名等々実に幅広い分野に及んでいることです。暮らしの断片ではなく、暮らし全体を、地域社会全体を総合的にとらえようという問題意識の広さが反映していると思います。二つ目は、書物を通して知識を深めるだけでなく、自らの足で地域をくまなく歩き、自らの目で確かめることを常とされていたことです。書齋の人であると同時に、行動する研究者であったがゆえに著述の内容には説得力があったと考えています。三つ目は、郷土史研究の成果を今に活かすということですが、先生は、お得意のパワーポイントを使って講演することに積極的でした。研究の成果を一人でも多くの方に伝えて共有する、様々な切り口からまちづくりに活かす、この点に力を注いでおられました。まさに、実践の人でもあったと思います。

その小澤先生が亡くなられた今、大子町では少しづつですが、歴史資源を生かしたまちづくりが多様な形をとって動き出しています。先生の意思を私たち後輩が引き継ぎ、少しでも実を結ぶよう微力ながら努力したいと考えています。第一線でも走り続けてこられた先生、どうぞ安らかに眠りください。合掌。

(齋藤典生)

出会い

高梨保彦

六十年ほどもさかのぼる話になります。私と小澤園彦さんとの出会いは大学在学中の三年次頃のことでした。

農学部に席を置いた小澤さんは、学部のおかれていた現在の阿見町で学ばれていましたから大子町出身でもなかなか知り合う機会がなかったのです。昭和三十年の春だったと思います。大学の正門を出て、水戸と常北を結ぶ道路の交差点に、私達が通常「コロッケ屋」と呼んでいた小さな店がありました。三十代後半の夫婦が営業する小さな構えで、昼食時は勿論、講義の前後、放課後も自分達の溜り場や巣のような利用の仕方を使わせてもらった懐かしいお店です。ある時、このお店で大子町長岡から通学していた小林清美（先輩）さんに偶然お会いしました。同伴していたのが小澤園彦さんだったので。「初原出身の小澤君だ。よろしく頼む」、初めて紹介を受けた日を思い出します。きちんとした学生服に角帽姿で、私のようなジャンパー下駄履き姿が恥ずかしくなるような立派な正装でした。

小澤さんは学部においては広沢教授のもと農業経済を学んで居られ、実に日本経済史の必要に迫られ木戸田先生の講義を選んだとのことで貴重な一日をそれに充てる覚悟と聞きました。

現在では記憶もさだかではありませんが、木戸田先生の講義は明治維新に至る幕藩体制の崩壊過程を扱うもので、封建体制の基盤である農民の分化を示すものでした。農村への商品経済の浸透により農民が各階層に変化してゆくと言う、確かな資料を基にした講義の展開は、当時私達が受けてきた受験日本史では到底触れ得ない内容でしたから、その歴史への切り口に斬新なものを感じたのでした。また、農村の変化を事実上動かしたとする中農層の

展開など歴史への新たな目を開かされた思いでした。

小澤さんは、さつくばらんなお話の好きな方だったと思います。講義の後など感想を率直に、しかも感動的に語られるのが常でした。それはあたかも取りこんだ知識を言葉にすることにより、再度確認しているかのようで、若かったあの頃の懐かしい姿を思い出すことができました。

小澤さんや小林先輩との語らいの中で、私が「袋田桜岡家の新田開発」について聞かされたのもこの頃のことでした。幕末より維新前後にかけて桜岡家が歴史上如何に重要な役割を果たしたかなど、はじめて知ることでした。

当時、私は袋田に住んで居りましたから、自分の無知・無関心に恥じ入りましたが、後年小澤さんが郷土史研究者として大きな成果を残したことを思えば、その動機になったものこそ、水戸で週一度のこの六ヶ月の講義期間やこの語らいの中にあっただけではないかと思われるのです。

卒業後はお会いする機会が少なくなりましたが、互いに教職の身でしたから随所で貴重な出会いを続けて来ました。小澤さんが精魂こめて育てた生徒を私が預かる形も一つの出会い、授業時での郷土史の扱い、中高校長連絡会議などでも誠意に充ちた意見を頂きました。さらに大子町における高校再編時には、高校の安定的存続をめざして真剣な討議もさせて頂きました。

やるべきことをやるだけでなく、いいことなら最善にやりぬくこと、これが小澤さんの仕事や研究への姿勢であり、私も共感できるものでした。私達はどのような職業につくものであれ、その職にたずさわる者として、そこに在る意味とは何かを問い続けなければなりません。私達は残念ながら貴重な存在を失いました。

ひたすらご冥福をお祈りいたします。

（元大子町教育長）

小澤先生を偲ぶ

大森政夫

小澤先生が教育長職を辞められて、二、三年経った頃の話である。頃藤川下坪の久慈川にあった渡船場の話を地元小磯さんに聞こうと先生と一緒したことがあった。小磯さん宅では、昭和五十九年頃まであった渡船の実態をお聞きした後、現地を見に行つた。先生との久々の現地視察であった。帰りに先生は、すぐ近くの金山（かねやま）を見ながら、「あの山に鍵金峠（かぎかねとうげ）がある。行ったことがあるかい、行ってみよう。今じゃないよ、今は青葉で写真は無理だ。それに蝮が居ると危険だから、冬にしよう」ということになった。

あれから何度目の冬が訪れた。先生は鍵金峠に行くことを忘れることなく、年賀状の片隅に書き添えたり、街で会った時などもその話を持ち出していた。そうしてまた時が過ぎてしまった。先生が行ってみたいと話をしてきた鍵金峠。私の家からは近い位置にあるので、ちよつと下見に行つて、その状況をお会いたし時にでも話そうと、一人で出掛けた。晩秋の昼過ぎであった。峠の頂きに難無く着いた。藪の間隙から、眼下に久慈川を挟んで、館城址が間近に見えた。しかし、宮平坪へ下る道は、わからない状況であった。先生は、常に出来るだけ史料を収集した上で、現地を調査することを怠らなかつたから、いつか話をしていた加藤寛斎筆『常陸国北郡里程間敷之記』に示されている、鍵金峠へ行ってみたかつたのではないかと思われた。

その後、先生が入院されたことを知って驚いた。と同時に、鍵金峠へ行って下見をしてきた話もできなくなつてしまった。今思えば、先生には、「月居峠」や「洞坂峠」等の峠シリーズの著書があるが、鍵金峠も下調査が進められ、峠へ自ら立ちたかつたので

はないか。しかし、今となつては、峠へ行くことの約束も実現できず、また、先生の峠にまつわる話も聞くことが出来なくなつてしまひ残念でならない。

（大子町文化財保護審議委員）



現地巡りで説明する小澤先生

ふるさと歴史講座現地巡りの受講生と



高齢者大学での講義の様子

子ども達に講義する小澤先生

小澤紈彦先生の思い出

都筑 積

小澤先生、こんにちは。永いご無沙汰をお許しください。

先生、今日二月十一日には「大子町の文化遺産を活かす」をテーマに、第五回のシンポジウムが、大子町文化福祉会館「まいん」で開かれました。県内外から大勢の方々が集まりました。

今回のシンポジウムの内容は、「絵馬調査」、「木造校舎の調査研究」、「大子町全域屋台調査」、「コンニャク用具調査・式典報告」、「近津神社の中田植」、「土壁塗りと漆体験講座」、「観光ボランティア育成講座」等の報告、並びに菊池健策先生、山崎祐子先生、阿久津久先生をコメントーターに迎えた質疑と意見交換でした。大盛況でした。会場は熱気にあふれていました。改めて、大子町の豊かな自然環境や長い歴史の中から生まれた伝統的産業や歴史的建造物など、文化遺産のすばらしさと数の多さに驚きを隠せませんでした。

そして、先生がライフワークとして取り組んだ「大子町の文化遺産を後世に活かす」という想いが、野火のように広がり、実を結ぼうとしています。うれしい限りです。改めて、先生の存在の大きさを痛感しています。

一方、「袋田の滝、生瀬滝」が国の名勝指定になる旨、文化庁から答申があり、旧黒沢中学校と旧上岡小学校が、国登録の有形文化財に登録されました。また、「常陸大子のコンニャクの栽培用具及び加工用具」が国登録の文化財に登録されました。さらに、「石仏」も、「絵馬」も、貴重な報告書にまとめられました。

次の先生への報告は、先生との出会いについてです。先生覚えておられますか。今から五十三年前、昭和三十七年に大子中学校で先生に出会いました。先生は、私たち一年六組の担任でした。

先生は、大子中の校訓である、「研究」「明朗」「感謝」「自治」を、私たち四十五名の仲間にも、熱く伝えてくれました。今も忘れられないのは、社会科の授業でした。毎時間資料をたくさん用意され、地球儀と地図を使い、日本と世界の国々との繋がりを教えてくれました。これまでの授業のイメージが一変しました。中学で初めて、「わかる楽しさ」を実感しました。

また、生徒会活動も強烈な思い出です。三年間経験した「幹部研修会」も忘れられません。一泊二日の日程の中で、盛金小学校や雲巖寺を使い、「リーダーとしてのあるべき姿」を学びました。「われらは大子中学校の生徒である。われらは大子中学校のリーダーである。われらは全ての仕事に積極的に打ち込まなければならぬ。われらはあらゆることに責任を持つ」。当時の中学生に取っては、高い目標でした。自然と志が高くなりました。

もう一つの思い出は、校内陸上記録会、運動会、音楽会、教育祭、マラソン大会など、行事への取り組みです。クラスが団結し、勝利を目指しました。選手でない者は応援団を作り、選手をサポートしました。また、教育祭で演じた劇「イワンの馬鹿」に出演したことも、忘れられない思い出です。

そして、先生は一年が終わる時、私たち一人一人に、「もっと学習意欲を持って、明日やるのでは遅い」と、熱いエールを送ってくださいました。「クラスの仲間と小澤先生とずっと一緒にいたい。先生と別れたくない」と、全員が思いました。

その後、私が高校、大学と進み、教職の道を選んだ時も、先生はしっかりと「後ろを押ししてくださいました。先生、本当にありがとうございます。感謝、感謝です。そして、五年前、私は大子に戻りました。先生の後を追いつながら、「大子が大好きな子どもたち」をしつかり育みます。「文化の香りが漂う大子町」を目指します。先生、これからも応援をお願いします。

(大子町教育長)

町史編さんと小澤園彦さん

井上和司

小澤園彦さんと初めてお会いしたのは、昭和四十九年（一九七四）の秋である。私は、この年の九月一日に中央公民館内に設けられていた大子町史編さん事務局に赴任した。二十歳のときである。小澤さんは三十八・九歳の頃であったと思う。当時小澤さんは小中学校の教員であったが、昭和四十七年に町史編さん事業が開始されると、その編さん委員会の常任委員として活躍されていた。毎月一、二回のペースで日曜日に数名の委員が集まり、町内各地に遺る歴史資料、古文書等の調査、目録の作成などを行っておられた。小澤さんはまさに誠実な人柄で、この調査会に毎回欠かさず参加されていた。

そうした作業が一段落した昭和五十六年には、本格的な『大子町史』の編さんに向けて体制の充実が図られた。外部の機関から専門家あるいは研究者を招請して、自然環境、原始古代、中世、近世、近現代の各時代ごとに部会を設け、それぞれの部会において実質的な作業が進められていった。小澤さんは近現代部会に所属されていた。部会では、原則月一回程度の打合せ会を行い、章、節、項、目をどうするか、執筆分担や分量、原稿枚数などについても話し合われた。

大子町史は、昭和五十五年に『写真集』が発行され、以後『資料編』上巻そして下巻と全部で五巻が刊行されている。最後の『通史編』下巻が刊行されたのは平成五年（一九九三）であるから、町史編さん事業が開始されてから実に二十一年の歳月を要して、『大子町史』の一応の完結をみたのである。

小澤さんは、この間いつも真摯に取り組まれていた。『通史編』下巻では実に十四項目を執筆されている。その主なものは、明治

期の産業、地方改良事業と農村振興、林業、馬産、商工業、鉱業、大正期から戦前昭和期の道路鉄道交通、水郡線の建設、地域産業、昭和恐慌から戦時下の農村経済更生運動、満州移民などである。これらを執筆すると言うことは、極めて長い時間をかけて苦勞をいとわず、広範囲にわたり調査を進め、資料を集めて研究しなければならぬ。調査研究あるいは執筆に当られた小澤さんに、心から感謝申し上げたい。

ところで、小澤さんとの原稿のやり取りについて、大変申し訳なく思ったことがある。それは予定の枚数を大きくオーバーしているため、大幅に削らなければならないときだ。折角書いた文章を大きく削ると言うのは、本人にとってはとても辛いことである。しかし、小澤さんには何も言わずに了承いただいた。

『通史編』下巻の刊行をもって町史編さん事業は一応終了したのであるが、事務局はその後も資料の整理などのかたわら、ふるさと再発見講座の開催や機関誌「ほない歴史通信」の発行などを行ってきた、これらの事業にも小澤さんには深くご協力いただいた。

小澤さんと最後の仕事となったのが、平成十年（一九九八）に開催した企画展「水戸藩主・光圀と斉昭の巡村―そのゆかりの地と遺品展―」である。当時、小澤さんは大子町の教育長でおられ、この展覧会実施については、町長との予算の折衝のほか、展示資料所蔵者宅へも資料提供依頼のため一緒に歩いていただいた。私はこの年を最後に、異動により事務局を去ることになった。

小澤さんは、その後も講演会や講座の講師として活躍されていた。地域の歴史に造詣が深いだけでなく、教育者としての矜持があったように思われる。

（元町史編さん事務局）

忘れえぬ人

桜庭宏

小澤園彦さん、筆無精お赦し願います。この挨拶も届かない遠くへ旅立ったのですね。六年前、大子町の山林の現状と「これから」のまちづくり計画の資料について交わした電話で、小澤さんの情熱を秘めたお声の説明をいただいたことが、心に浮かんできます。

小澤さん、貴方に初めてお会いしたのは三五年以上前です。その後「大子町史編さん委員会」の「近代部会」で、「一緒に書いた『写真集・資料集・資料編・通史編』の仕事を通して、多くのことを教えていただきました。率先垂範を信条とする貴方は、地に足をつけて地域の歴史を調べ、いまの地域を真底から見分けてこれからの地域を考えていく、その大事さを強調されていました。

貴方は生まれ育った地域の歴史と現状を理解するために、資料・文献の調査や研究、当事者へのインタビューを骨身を惜しまずに実行されました。その情熱を秘めた仕事ぶりは、茨の怪を前にして佇んだ町史編さんに携わった者を鼓舞し、町史編さんを全うさせた、と言っても過言ではありません。

貴方はまた若い時分に、教員の国内留学で「小繫事件」学問研修をなされ、そこで得た調査・分析の方法を、私たちとの仕事だけでなく、学校教育の現場で、生徒の資質と能力を引き出すためにも活かしていました。生瀬地域のリンゴ栽培をめぐる報告はその一つでした（「大子町史研究」第7号一九七九年）。

学校教育における教師像と現場における在り方についても、貴方はご自身の体験を踏まえたその実像と虚像を虚心坦懐に離されながら、世間と社会に学校教育の核心に触れる言動が少ないことを案じておられました。生まれ育った地域での学校教育に携わる人生の道を歩まれた貴方ですが、数々の岐路で逡巡されたことも

あったらと思うられます。その一つだったのでしよう、近現代部会例会後に、水戸市内の学校へ転勤の内示があり悩んでいる、とうかがったことがあります。その折に部外者の目から見た、水戸の学校現場・教育行政への感想を求められたのですが、恐らくすでにご自身で決断されていたのでしよう、水戸を断って隣の学校へ移動となった、と日を経ずして話してくれたのを覚えております。

町史編さんの仕事と直接に関わらない話を交わすことも、小澤さんと私が町史編さんに協働して取り組むうえで滋養となりました。写真集へ向けての現地調査を終えて、貴方が私を大子駅へ送るまでの車内で、時には私が常宿としていた菊屋旅館で、あるいは大子駅近くの踏切側の小料理屋「道」で（大森政夫氏同席）交わした対話は、貴方が写真集編集の大詰め、体調を崩された吉成英文氏に替わって作業担当者となった井上和司氏を励まして仕上げて下さったこととともに、大子町域の某かも知らない私にとつて、後に資料集、資料編、通史編を編む近現代部会の作業を推進する源泉力となったのです。貴方がいなかったならば、編さんの事務方と文字通り協働して作業を進めた近現代方式（と言われている）は成り立たなかつたでしょう。

小澤さん、貴方は町史編さん事業を終えた後も、近現代部会メンバーと「ほない歴史通信」を立ち上げて、地域の歴史を発掘する作業を続けてこられました。いま「地方創生」という言葉が持て囃されていますが、小澤さんならそこに何を思い巡らすのだろうか。そのことをお聞きできないのが残念です。事実と真実を無視して歴史を貶めることが大手を振っているいま、貴方の仕事の集大成が望まれている、その矢先に逝ってしまいました。小澤さんご自身が一番無念だったでしょう。集大成は、先に逝かれた私たちの仕事仲間と地域談義をされてからとなりますね。

ご冥福をお祈りします。

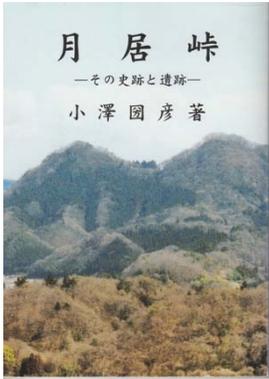
（北海道七飯町在住）

小澤園彦先生の遺志を継ぐ

大金祐介

去る平成二十六年十一月一日、小澤園彦先生が亡くなられた。突然の訃報だっただけに、私は未だに先生が亡くなられたことを信じられずにいる。先生には、私が高校一年生の時から、すなわち平成二十一年から約五年間にわたって、郷土史の師として大変お世話になった。先生からは、郷土史に関する知識や知見だけでなく、郷土史のおもしろさや郷土史を学んだり研究をしたりする上で必要なことなど、郷土史に関わることをたくさん学んだ。今日、私が楽しく、また有意義に郷土史に取り組めているのは、先生のご指導のおかげなのである。それ故に、先生の急逝には深い悲しみを禁じ得ない。今、私は、先生から受けたご恩に深く感謝すると共に、先生のご冥福を心よりお祈りしている。

私が弔問のために先生のご自宅をお訪ねした時のことである。私は、生前の先生が、私たち若い世代が郷土史に興味を持つようになったことを喜んでおり、またそのような若い世代の今後の活躍に期待を寄せていたということを奥様から伺った。その時、私は、まだまだ未熟ではあるものの、若い世代の一人として、また先生の弟子として、先生の遺志を継ぎ、先生の期待に少しでも応えられるよう、より一層奮起して郷土史に取り組んでいくことを心に誓った。



『月居峠 - その史跡と遺跡 - 』
先生から戴いた思い出の本

謹呈 小澤園彦

（筑波大学人文・文化学
群人文文学類三年）

大子町の文化遺産を活かす

—近年の成果と活動報告—

「文化遺産とは何か」とよく聞かれることがある。日本の文化財保護法では、(一)建造物、絵画、彫刻、工芸品、書跡、典籍、古文書等の有形文化財、(二)演劇、音楽、工芸技術等の無形文化財、(三)衣食住、生業、信仰、年中行事、風俗習慣等の民俗文化財、(四)遺跡、動植物、名勝地、地質鉱物等の記念物、(五)地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地等の文化的景観、(六)周囲の環境と一体をなして歴史的風致を形成している伝統的な伝統的建造物群、の六種類を「文化財」と定義している。

しかし、これらの概念では捉えられないものにも歴史的な価値を有する文化的所産が存在する。また、文化財として指定・登録されていないものにも歴史的価値のあるものがある。文化遺産とは、歴史的な価値を有する文化的所産を、文化財を含む広い意味で捉えたものであり、大子町について言えば、袋田の滝や桜等の自然、木造校舎や町屋等の建造物、各地区にある屋台・山車、神社の絵馬や石仏・石塔、お拵廻し等の習俗、山城や遺跡、浅川のささら等の伝統芸能や祭事、コンニャク栽培・加工の伝統的産業、さらに広げると将棋等の昔の遊びや地域に伝わる民話や伝説、農村風景等も当てはまる。つまり、町の先人たちの暮らしを今に伝える資料のことであり、大切に守り、次世代へ継承していくべき町の「たから」のことである。

近年大子町では、これらの文化遺産を活かすための活動が活発になり、その成果が花開き始めている。平成二十五年三月には、行政、住民、文化財保護団体等が協働して我が町の多様で豊かな文化遺産を活用し、それに関する情報発信、人材育成、普及啓発、継承、記録作成、調査研究など地域の特色ある総合的な取組に



コンニャク連干し体験ワークショップの様子



文化遺産活用シンポジウムの様子

より、文化振興とともに地域経済の活性化を推進することを目的に大子町文化遺産活用実行委員会が設立された。当実行委員会に所属する各団体が、国からの補助を受けて活動を展開している。

現在までの活動成果は、大子町の文化遺産をまとめたパンフレットやホームページ、スマートフォンに対応した文化財マップの作成、文化遺産を紹介する観光ボランティア養成事業、歴史的建造物の修復設計人材育成講座の開催、寺社に奉納された絵馬等の調査報告書の作成、歴史的建造物の調査、将棋、書道、お雛子の伝統文化親子体験教室の開催、中田植の紹介パンフレットやポスターの作成、伝統的産業や十二所神社祭礼、屋台、中田植などの民俗調査と報告書の作成など、実に多岐にわたっている。

これらの活動が実を結び、平成二十六年三月には「常陸大子の

コンニャク栽培用具及び加工用具一四六点」が国登録有形民俗文化財に、十二月には「旧上岡小学校」と「旧黒沢中学校」が国登録有形文化財に登録された。また、調査研究の成果でもあるが、九月に「近津神社の中田植」が町指定無形民俗文化財に指定された。こうした動きを多くの町民と共有するために、十二月二十日に国登録有形民俗文化財記念式典及び子どもワークショップを、また平成二十七年二月十一日には、「大子町の文化遺産を活かす」をテーマにシンポジウムを開催した。

とくに、後者においては一二〇人以上の参加があり、文化財の専門家による報告や提言・アドバイス、また町民からの質問や感想を含めた意見交換等によって会場は大いに盛り上がり、文化遺産の活用に対する町民の反応に手ごたえを感じるとともに、今後の活動に繋

げるヒントやきっかけをつかむことができた。

前記実行委員会の活動以外にも、今年度は七月に「小生瀬地藏桜一株」が町指定天然記念物に指定され、三月一〇日には「袋田の滝及び生瀬滝」が国指定名勝に指定されている。こうして振り返ると、とくに大子町の文化遺産が注目された一年だったように思われる。郷土の歴史や文化は我々町民の誇りである。町の魅力を再発見し、文化遺産を活かす活動をきっかけに町民が一つになれば、外の人が羨むような活力あふれる大子町になるのも夢ではないのかもしれない。

(家田 望)

編集後記

今回のほない歴史通信は長年大子町の郷土史研究の第一人者でおられました小澤園彦先生への感謝と敬意を込めて、追悼号という形で特集しました。教え子から見た先生の顔、教育長をされていた時の顔、町史編さん時の研究者としての顔、先生と親交の深かった方に執筆を依頼し、沢山のエピソードが集まりました。また、御家族の方から写真を提供していただき、こうして先生を懐かしむことが出来ました。ご協力いただいた皆様に心から感謝いたします。

(家田 望)

編集 大子遊史の会

編集人 齋藤 典生 (茨城大学教育学部特任教授)

野内 正美 (茨城県立歴史館資料調査員)

齋藤 仁司 (大子町教育委員会)

家田 望 (大子町教育委員会)

発行 大子町教育委員会

久慈郡大子町大字池田二六六九番地

大子町立中央公民館

☎ 0295 (72) 1148